

全面にビニールシートを張った
豚舎の壁面

オールアウト後に大切な 洗浄とバイオセキュリティ強化 徹底した洗浄で事故率軽減

離乳後の事故率改善を目指し、豚舎単位のオールアウトと
農場内のバイオセキュリティの強化に取り組んだ農場を紹介する。

豚舎のオールアウトと 農場内バイオセキュリティの強化

「豚舎のオールアウト」は、徹底的な洗浄・消毒や豚舎全体のメンテナンスを行ううえで有効な手段である。また、「農場内バイオセキュリティ」とは、農場内の各施設内（分娩舎、離乳舎、肥育舎など）に病原体を持ち込むリスクを下げる手順、手法の事である。この2つを同時に強化する事で、農場内での感染の連鎖を断ち切る事ができ、疫病の発生を低減しやすくなる。

今回は母豚250頭規模のウィークリー養豚の一貫農場を紹介していく。ビッグフローを調整して従来より長い期間をかけて離乳舎のオールアウトを実施し、洗浄、消毒の徹底と離乳舎のバイオセキュリティの強化を行った。

実施した離乳舎は3棟ある離乳舎のうちの1棟で、豚房内の床はコンクリートと半スノコの豚舎である。2週分の離乳豚が飼育可能で、カーテン換気による開放豚舎である。

ビッグフローとしては2週連続で離乳豚の導入があり、その後70日齢程度まで飼育した後、肥育舎に2週かけて移動している。今回は、その2週分の豚を一度に全て肥育舎に移動し、分娩舎からの離乳子豚の導入を1週間延期する事で2週間のオールアウト期間を確保した。

その期間に豚房内の洗浄と修繕、簡単にできるバイオセキュリティ強化に取り組んでいった。

オールアウト期間に行う 徹底した洗浄と修繕

オールアウト期間中の洗浄消毒では、既存プログラムが豚房内の洗浄消毒がメインだったのに対し、①通路の洗浄、壁・天井のほこり落とし（写真1）②洗浄の強化（水洗のみ→逆性石鹼使用）③二酸化塩素による燻蒸消毒の3点を追加した表）。

ウィルスや細菌などは豚房内だけでなく、通路や天井のほこり、クモの巣などでも長期間生存する事が知られている。①では洗浄の前に竹ぼうきを使って壁、天井のほこりやクモの巣を入念に落とした。また、一般的に消毒薬は糞などの有機物の存在下で効果が減弱されてしまうため、洗浄作業でいかにこれらを取り除くかが重要である。

②では逆性石鹼の消毒効果に加えて、逆性石鹼の界面活性作用によって有機物の汚れが落ちやすくなるため、従来の水洗のみよりも効率的に洗浄作業を実施する事ができた。

③では、豚舎内のすき間に目張りを実施したが、壁側はビニールシートを全面に張って密閉性を確保した（本ページ上部写真）。この離乳舎は隣に別の豚舎が隣接していたため、豚舎側の壁のビニールシートは燻蒸後も外さずに、そのまま張り続けた（ちなみに実施時期は晩秋だったため、冬場の寒さ対策も兼ねていた）。また、壁に開いた小さな穴にもガムテープで目張りをする事で、結果的にすき間風対策にもつながる作業も実施

する事ができた。

燻蒸消毒は製品の取り扱い方法を誤ると大きな事故につながる可能性が特にあるため、メーカーや専門家の指導の下で実施する事が望ましい。更に給水ニップルを取り外しての消毒や破損個所の修繕など、従来の作業の中では実施が難しかった作業も今回実施する事ができた。

簡単な方法で バイオセキュリティを強化

次に離乳舎のバイオセキュリティの強化を行うため、専用長靴と専用衣服の着替え場所の設置を行った。それまでも豚舎専用長靴と専用衣服は用意していたが、着替え場所が乱雑になりやすく交差汚染のリスクがあった。

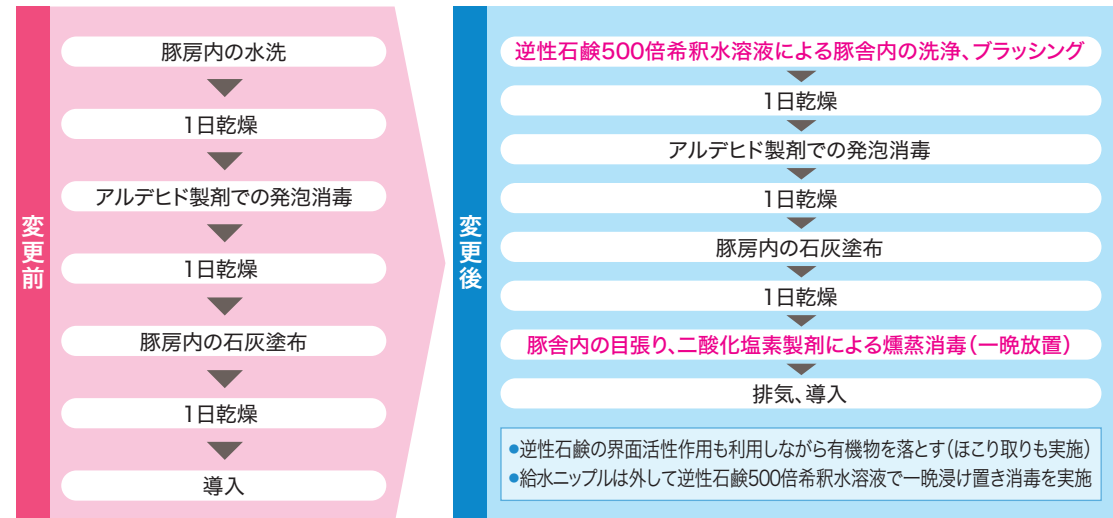
そこで離乳舎の入り口通路前に屋根付きの着替え場所を設置し、そこに置いたスノコの上で着替える事で、着替えを快適に実施する事ができ、かつ交差汚染も防止できるようにした（写真2）。

また更に、踏み込み消毒槽の場所を水道から近い位置に変更する事で、消毒薬のこまめな交換もできるようにした。

バイオセキュリティを強化するためには、担当者や農場主だけが実施可能な手順では継続が難しい。今回の事例のように、誰でも簡単に実施できる手順である事。それが、効果を継続するうえで重要である。

対策の実施前は10%程度あった離乳舎での事故

表. オールアウト後に行ったプログラムの流れ



率が、実施後のロットでは3%以下と大きく改善された。この農場では他の離乳舎でも同様の対策を実施し、事故率の改善につながっている。



写真1：天井は竹ぼうきによるほこり、クモの巣除去と逆性石鹼500倍希釈水溶液による洗浄消毒を実施

写真2：屋根付きの着替え場所では専用長靴の保管場所と専用衣服の掛け場所も設置している